

高松市指定有形民俗文化財

清水神社の甕塚調査報告書

2017年3月

高松市教育委員会

例　　言

1 本報告書は、高松市由良町 1050 に所在する清水神社が実施した高松市指定有形民俗文化財の「清水神社の甕塚と上御盥跡」の神事に際して執り行つた甕塚の発掘に伴う調査報告書である。

2 現況測量から再埋納までの日程は次のとおりである。

現況測量：平成 23 年 11 月 25 日・26 日

発掘調査：平成 24 年 2 月 18 日・19 日

整理作業：平成 24 年 2 月 21 日～3 月 21 日

神　　事：平成 24 年 3 月 25 日

再 埋 納：平成 24 年 5 月 3 日

3 発掘については高松市教育委員会教育局文化財課（現：高松市創造都市推進局文化財課）文化財専門員山元敏裕及び同大嶋和則の立会のもと、埋納については大嶋の立会のもと、清水神社宮司十河典永が氏子の協力を得て実施した。また、出土品の整理作業については高松市教育委員会において実施し、大嶋が担当した。

4 調査から報告書執筆に際し、下記の関係諸機関並びに方々から御教示及び御協力を得た。記して厚く謝意を表するものである。

清水神社、清水神社宮司十河典永、清水神社氏子一同、

大久保徹也（徳島文理大学）、田井静明（瀬戸内海歴史民俗資料館）

5 本報告書の執筆は大嶋が行い、編集は大嶋及び文化財課非常勤嘱託上原ふみが行った。

6 挿図として 1/2,500 及び 1/10,000 の都市計画図を一部改変して使用した。

7 本報告の方位は磁北を示す。標高は、現地周辺において基準点等が存在しなかつたことから、任意の高さとし、甕塚の平面図作成に当たっては、甕塚周囲の玉垣地覆石北東隅上面を基準として 10 cm のコンターラインで作図をした。土層及び土器観察の色調表現は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・一般社団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

8 出土遺物の実測図のうち、甕は 1/8、その他の土器・瓦は 1/4、鉄器は 1/2、遺構の縮尺については図面ごとに示している。

9 出土遺物については甕塚に再び埋納した。調査で得られた記録は高松市教育委員会で保管している。

目 次

| | |
|-----------------|----|
| 第1章 調査の経緯と経過 | |
| 第1節 清水神社の概要 | 1 |
| 第2節 発掘に至る経緯 | 2 |
| 第3節 発掘の経過 | 2 |
| 第4節 整理作業の経過 | 3 |
| 第5節 雨乞い神事と現状復旧 | 3 |
| 第2章 地理的・歴史的環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 3 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 |
| 第3章 調査成果 | |
| 第1節 墓塚 | 5 |
| 第2節 墓 | 5 |
| 第3節 その他の遺物 | 5 |
| 第4章まとめ | |
| 第1節 墓塚の構築時期について | 14 |
| 第2節 墓塚の墓について | 14 |
| 第3節 墓洗いについて | 15 |
| 遺物観察表 | 17 |
| 写真図版 | 18 |

挿図目次

| | | | |
|---------------------|---|-----------------|----|
| 第1図 清水神社位置図 | 1 | 第7図 石室蓋石及び床面平面図 | 8 |
| 第2図 清水神社関連施設位置図 | 2 | 第8図 石室平面図及び立面図 | 9 |
| 第3図 『讃岐国名勝図会』に描かれた墓 | 3 | 第9図 石室断面図 | 10 |
| 第4図 周辺遺跡分布図 | 4 | 第10図 墓実測図 | 11 |
| 第5図 墓塚位置図 | 6 | 第11図 北側石室出土遺物 | 12 |
| 第6図 墓塚平面図及び立面図 | 7 | 第12図 南側石室出土遺物 | 13 |

第1章 調査の経緯と経過

第1節 清水神社の概要

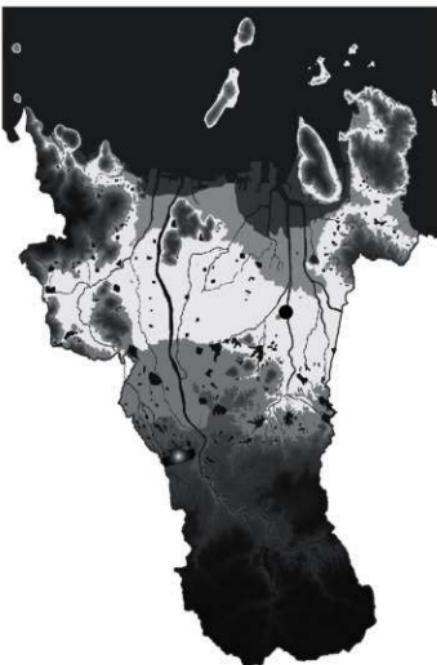
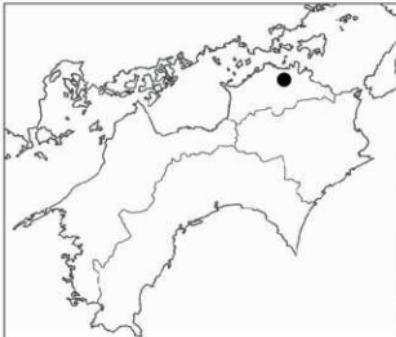
清水神社は高松市由良町の由良山東麓に所在する神社である。景行天皇 54 年の創祀とされ、古くは好井社、由良明神、正一位清水大明神と称されていた。祭神は景行天皇の皇子の神櫛王（祭神名は神櫛明命）である。祭礼には神櫛王ゆかりの甕 12 口で御神酒を作つてお供えをしていたといわれている。

後に自性院莊嚴寺が別当を務めており、『自性院記録』によると、承和 8 年（841）は大旱魃で、国司の命により僧真雅が雨乞いを行うことになり、甕を使って祈ったところ大成功したといわれる。また、嵯峨天皇の勅額「正一位好井」を賜ったとされる。

神社は当初、山頂のやや東にあったとされ、永祿 3 年（1560）に田井城主長尾清長が東側中腹に復興したとされている。その後、天文年間（1573～92）に長宗我部元親の兵火にあり、神櫛王ゆかりの甕 12 個のうち 3 個を残して社殿も焼失し、残った 3 個の甕を里人たちは大切にお守りしていたが、今度は風水害にあって 1 個を破損してしまい、残った 2 個の甕を本殿南側の甕塚に納め、再建した清水神社の本殿床下に破損した甕を埋めたとされる。

江戸時代には藩主松平氏の尊崇厚く、国中十ヶ寺で祈願をしても雨が降らない時に清水神社で祈願したとされる。雨乞いの際に、甕塚から甕を掘り出し、神社南東に所在する上御盥・中御盥・下御盥から神水を取り、甕を洗えば必ず雨を得たが、甕を洗ったものは必ず亡くなるという伝承がある。降雨量の少ない香川県ならではの特殊な雨乞い行事を伝える文化財であることから、「清水神社の甕塚と上御盥跡」として昭和 56 年 9 月 10 日に高松市指定有形民俗文化財となっている。

また、「甕洗い神事」が有名であるが、毎年旧暦の 5 月 30 日（現在は 8 月第 1 土曜日）の夜に「お火上げ神事」と呼ばれる雨乞い行事も行われている。かつては、多くの里人が雨乞いと五穀豊穣を祈りながら、手に手に松明をかざして由良山頂上の竜王社を目指し上り、竜王社に着くと神官が大祓の儀式を行い、その後、青松葉に火をつけ大炎をつくっていた。現在は、焚火は取りやめている。



第1図 清水神社位置図

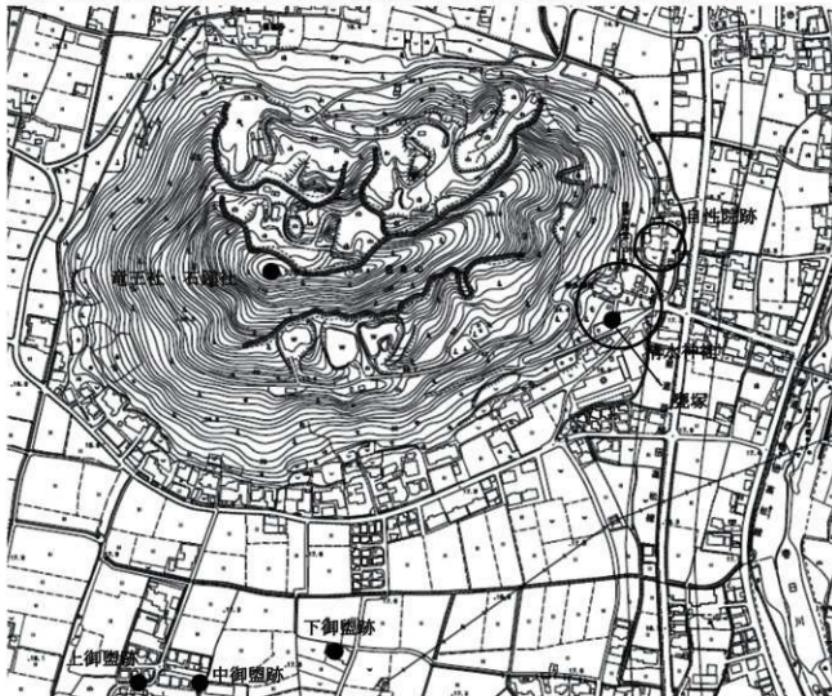
第2節 発掘に至る経緯

雨乞い神事については、神社境内に建つ石碑等から江戸時代には何度も行われていたことがうかがえるが、昭和 19 年（1944）を最後に途絶えており、これまで継承されてきた神事を知る人が少なくなってきていた。また、甕塚に埋納されている甕についても、幕末の『讃岐国名勝図会』に描かれた皿鉢状の絵と、『川島郷土誌』に掲載されている昭和 14 年（1939）に甕を発掘した人の「小さなラッキョウ甕」という証言（川島郷土誌編纂委員会 1995）が異なるなど、その実体は不明であった。

このため所有者の清水神社から、神事及び甕塚の詳細について後世へ正しく伝承するため、甕塚の甕を発掘し神事を行い記録として残したいという申し出があり、平成 23 年 11 月 25 日に高松市文化財保護条例に基づき現状変更承認申請書が提出された。高松市教育委員会では平成 24 年 2 月 8 日に高松市文化財保護審議会において審議の上、2 月 10 日に高松市教育委員会の文化財専門職員の立会を求めるることを条件に変更承認書を交付した。

第3節 発掘の経過

高松市教育委員会では、平成 23 年 11 月 25 日及び 26 日に甕塚の現況の確認のため、測量を実施し記録を行った。発掘は平成 24 年 2 月 18 日の 9 時から 13 時に実施された。まず、清水神社宮司による神事の後、宮司が甕塚の円礎を 1 個取り出した後、氏子が交代で発掘を行った。高松市教育委員会は作業中に平面図及び断面図の記録作成を順次実施した。甕の取上げ後、宮司が最も大きい甕の破片の洗浄を行い、続いて氏子もその他の破片について洗浄を行った。翌 19 日には、高松市教育委員会において甕塚内部の石室に堆積した埋土の除去及び石室の図面作成を行い、調査を終了した。



第2図 清水神社関連施設位置図

第4節 整理作業の経過

発掘で検出した甕及びその他の遺物については、神社社務所で一時保管した。平成24年2月21日に高松市教育委員会文化財課の収蔵施設に移動し、接合・実測等の整理作業を行った。

整理作業後、甕塚に再埋納するため接合した甕のうち石室に入らない部分については接合部分を再度分離する作業を行った。平成24年3月21日に再埋納のために氏子の協力のもと清水神社へ運搬を行った。

第5節 雨乞いと現状復旧

雨乞い神事は平成24年3月25日に執り行われた。神社拝殿中央に甕を祀り、本殿に捧げてあった上御盥跡から取水した神水を宮司が柄杓に取り、水をかけて洗うしぐさを行った。なお、同神事の映像記録については清水神社が撮影、保管している。

神事後、5月3日に氏子の協力のもと甕の再埋納を行い、現状復旧した。

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

香川県の中央に低い山塊によって囲まれた高松平野がある。讃岐山脈から瀬戸内海に流れる本津川・香東川・春日川・新川などの堆積作用によって形成されたものである。高松平野の山々は1400年前頃の火山活動により噴出した溶岩が浸食されたもので、屋島のように頂部に安山岩を頂くメサと、由良山のように溶岩の噴出部分が残る火山岩頭からなり、平野の景観を特徴付けています。また年間降水量が1,000mm程度と少なく、河川は涸れ川となることから、ため池が多いことも特徴的である。

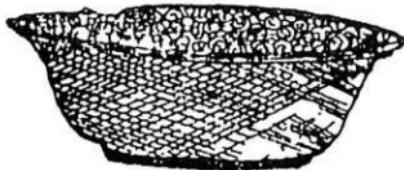
清水神社の所在する高松市由良町は、高松平野の南東部に位置する。町内の西部に所在する由良山は標高120.29mの独立丘で、黒雲母デイサイトからなり柱状節理が発達している。由良山の東側には春日川が北流している。現在は直線的な流れとなっているが、微地形を観察すると蛇行した旧流路が河川の両側に認められる。現在の春日川沿いでも神社北側に「川久保」、南側に「切戸」といった河川に関する地名が見られる。清水神社は由良山の東麓に位置し、そこから100m以上の参道が東に向かって続き、春日川に突き当たった場所に御旅所を有する神社である。

第2節 歴史的環境

神社周辺では発掘調査例が少ないこともあり、弥生時代までの目立った遺跡は知られていない。古墳時代中期には神社南方約1kmにおいて市内で最大の円墳として知られる高野丸山古墳が所在する。また、高野丸山古墳の北側には南海道跡が東西方向に通じており、南側には白鳳期～奈良時代にかけての高野廃寺なども見られる。このほか、春日川の東岸の大灘遺跡において7世紀代に機能していたとみられる旧河道が検出されているほか、その南に位置する由良南原遺跡で縁袖陶器が出土するなどしておらず、周辺に集落が存在していたと考えられる。

中世では大灘遺跡で12～13世紀、由良南原遺跡で12～14世紀の集落が検出されており、中でも由良南原遺跡では御堂又は社と考えられる建物が検出されている。中世段階では由良山の山頂部に由良山城が、東麓に由良城があったとされるが、現状では目立った遺構は見られない。

近世になると、由良山において採石が行われるようになる。採石の開始時期は不明だが、清水神社及び神社東方約1kmに所在する蓮勝寺の由良石製の手洗石に元文2年(1737)と刻まれていることから、少なくとも江戸時代中期以降には採石が行われていたことがうかがえる。



第3図 『讃岐国名勝図会』に描かれた甕

由良石の生産については『川島郷土誌』に詳しい。石材は、主に石垣や住宅の基礎石として近隣地域で使用されており、墓石をはじめ寺社用の燈籠等も作られている。明治から大正期にかけては耐火性に優れるということから、土地造成の石垣や建物基礎石に欠かせないものとなり、墓石と並んで大きな役割を果たしてきた。そのほか、唐臼、礎臼、餅臼など生活必需品の製品も作られるようになつた。また、由良石の特徴は雲母安山岩特有の暖かい温もりで、淡青色と淡褐色の落ち着いた色合いから受けける上品な感覚は、建築材料として急速に人気が高まり、東京帝国ホテル、歌舞伎座、東京帝国大学付属病院、名古屋市役所等に多量に使用された。地元を中心とした土木資材から建築装飾資材として広く全国的に評価され始めた。

昭和 19 年（1944）1 月 23 日、木田郡林村に陸軍の飛行場建設が決定し、同年 8 月には滑走路が完成した。これに伴い、由良山にも山麓から中腹にかけて数多く防空壕が掘られ、山上には高射砲が設置されるなどの要塞化が図られ、飛行場の戦闘機を隠すための掩体壕の整備も行われた。

戦後、由良石は特有の淡青色と淡褐色の二色が織りなすモザイク模様が平和を象徴する色彩としてぴったりであること、敷石の上を歩行する際のタッチが非常にソフトであることが高く評価され、皇居東庭約 15000 m² の敷石工事の受注が決定した。昭和 41 年（1966）1 月 21 日に採石場において新宮殿造成用採石奉告祈願祭の神事が行われ、大事業の始まりが行われ、昭和 43 年（1968）に竣工した。しかし、その後良質な石材の不足、安価な輸入石材やコンクリート製品の普及により、次第に採石が行われなくなった。



| | | | | |
|-------------|-------------|-----------|-------------|----------|
| 1 墓塚 | 2 空池跡地遺跡 | 3 六条下所遺跡 | 4 六条上青木遺跡 | 5 中林遺跡 |
| 6 上林遺跡 | 7 由良山城跡 | 8 大森遺跡 | 9 由良南原遺跡 | 10 北野遺跡 |
| 11 錦野西遺跡 | 12 旧南海道跡 | 13 三谷中原遺跡 | 14 蔵野波跡 | 15 岛野山古墳 |
| 16 横内東遺跡 | 17 半石上 1 分墳 | 18 宮ノ浦遺跡 | 19 高野南 1 分墳 | 20 高野魔寺 |
| 21 川島本町山田遺跡 | | | | |

第 4 図 周辺遺跡分布図

第3章 調査成果

第1節 墓塚

墓塚は清水神社の境内地内に所在し、拝殿の約15m南側に位置する。モドラ製の玉垣、石製の玉垣によって二重に囲まれている。モドラ製の玉垣は直径5cm程度の丸太を立て並べ、モドラに穴を開け、細い鉄棒を挿入し、つなぎ合わせている構造である。その内側の石製の玉垣は、由良石製で、高さ96cmを測る。直方体の石材複数個を土台とし、直方体の柱を東西方向に8本、南北方向に11本立て並べ、その上部に五角柱の石材が設置されている。五角柱の石材同士は上部よりチキリによって固定されている。

この石製の玉垣によって長方形に囲まれた中に、拳大の黒色の円礎を集積しており、東西1.77m、南北2.74m、高さ25cmを測る。円礎によって構築された塚上部は、石材間に黒褐色砂混粘質土が見られるが、これらは構築後に堆積したと考えられる。この円礎及び黒褐色砂混粘質土層の下端はほぼ周辺地盤と同じ高さとなっている。この円礎の下層でにぶい黄色砂混粘質土層が見られ、この層を5cm掘り下がったところで石室を検出した。

石室は由良石の板石で構築されており、堅穴式である。蓋石の上面での検出長は東西1.15m、南北2.00mを測る。蓋石は幅30~40cm、長さ1.0~1.15m、厚さ15cm程度の板石を東西方向に6石架構しており、蓋石の一部は両端がL字に薄くカットされ、側壁にはめ込めるように加工している。各蓋石の間はモルタルにより目地が塞がれている。石室内部は東西93cm、南北1.80m、高さ1mを測る。中央に板石が立てられ、南北2室に分かれている。北側は東西93cm、南北87cm、南側は東西93cm、南北84cmを測る。床面は4石の石材からなり、壁面は3段に石材を構築するが、南北石室を分ける中央の板石は周囲より1段低く、2段積みである。いずれの目地も漆喰で塞がれた状況である。発掘時には1段分の高さほどまで水没した状況であった。

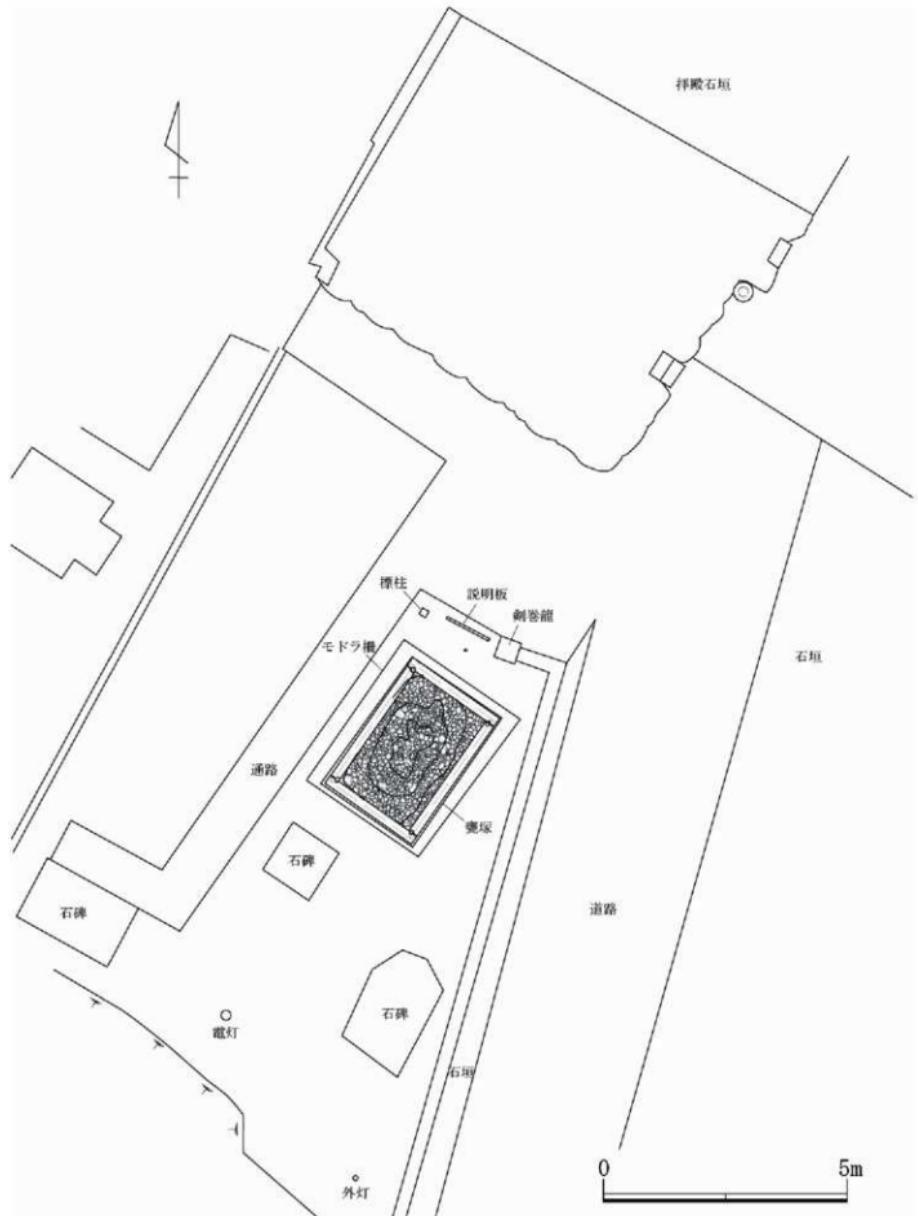
南北それぞれの石室内部において、甕を検出した。甕は下半部の大きな破片となっており、その中に小さい破片をまとめているような状況で出土した。また、水平に設置されたような状況で出土しており、石室内埋土の浅黄色粘土及び灰白色粗砂については埋納の際に充填された可能性も考えられる。

第2節 甕

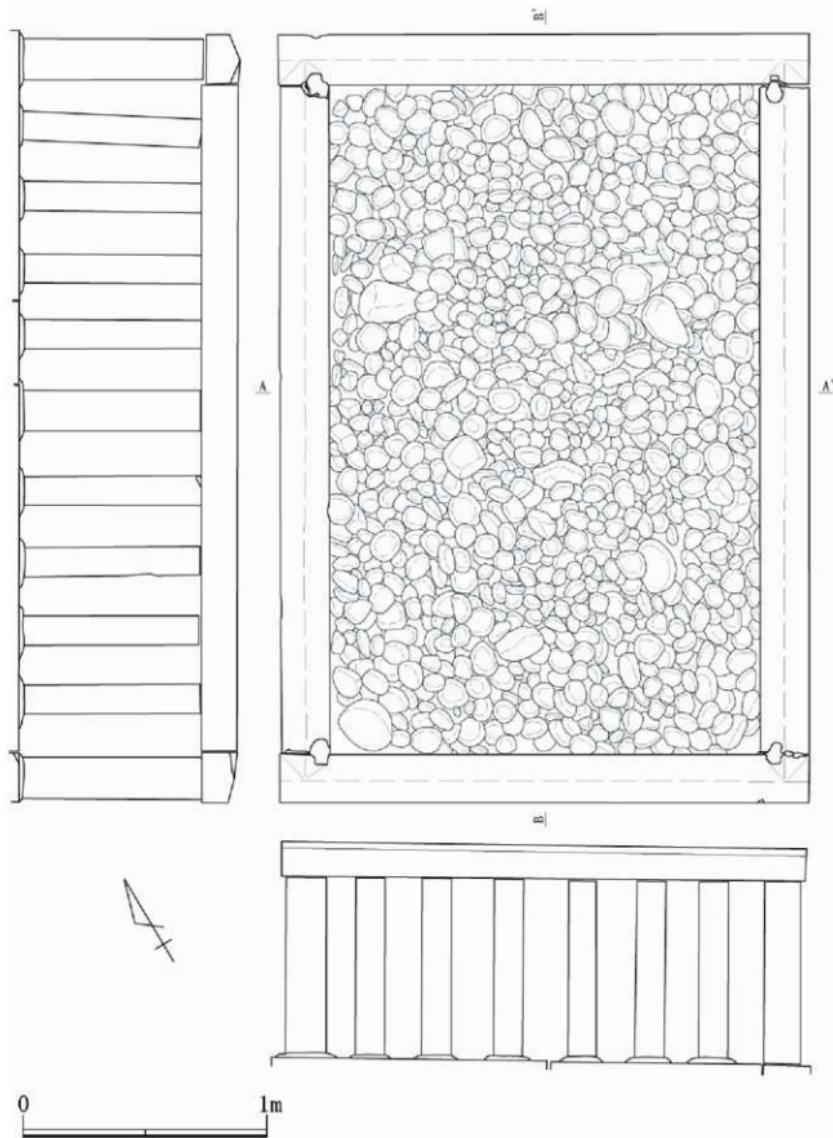
南側石室に納められていた甕(1)は、やや肩が張った卵形の体部に短く外反する頸部がついており、口縁部はやや肥厚させ、面を持つ。器高107.6cm、口径44cm、体部最大径95cmを測る。外面には格子目タタキ、内面には同心円状の當て具痕が認められる。北側石室の甕(2)は破片が少なく、体部下半(現存高65cm、最大径87cm)と頸部のみ残る。残存部分から推定すると、南側の甕よりもやや細身となると思われるが、同様の調整であり、形態もほぼ同じになると予想される。いずれも7世紀頃の須恵器の甕と考えられる。なお、南北両石室の破片は概ね石室ごとで接合できたが、一部の破片は他方の石室の甕に接合するものもあった。

第3節 その他の遺物

石室内からは甕以外にも少量であるが、遺物が出土している。3~11及びM1~M3は北側石室から出土したものである。3は瓦器椀であり、中世前半のものである。4は備前焼陶器の皿である。薄手のもので、19世紀頃のものと考えられる。5は備前焼陶器の甕である。口縁端部を折り曲げ、玉縁化しており、14世紀前半頃のものと考えられる。6は土師質の平瓦と考えられる。凹面側に一部タタキが認められる。7は瓦質の丸瓦であり、凹面は布目、凸面はヘラミガキとナデである。近世の瓦である。8は須恵質の平瓦である。凹面布目、凸面格子目タタキが見られる。9・10は土師質の平瓦であり、凹面布目、凸面縄目である。11は土師質の平瓦であり、凹面タタキ、凸面縄目である。M1は鉄釘である。釘に対して直交方向の木質が付着している。M2は鉄板であり、用途不明である。M3は鉄

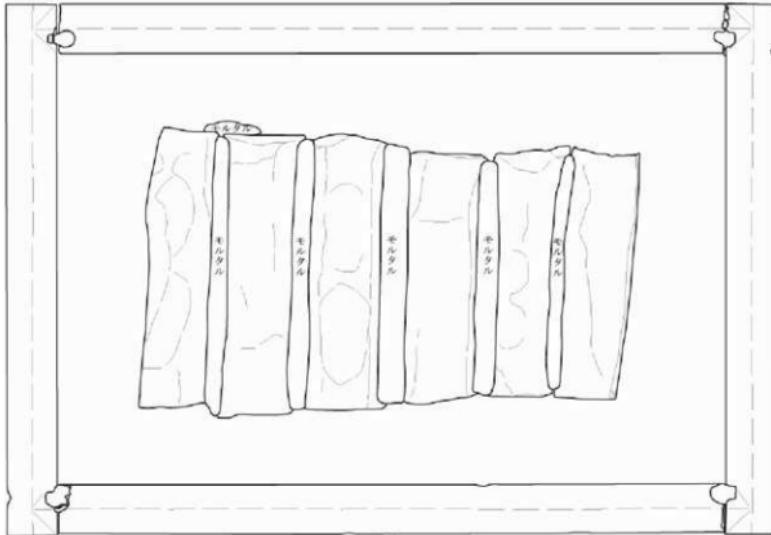


第5図 墓塚位置図

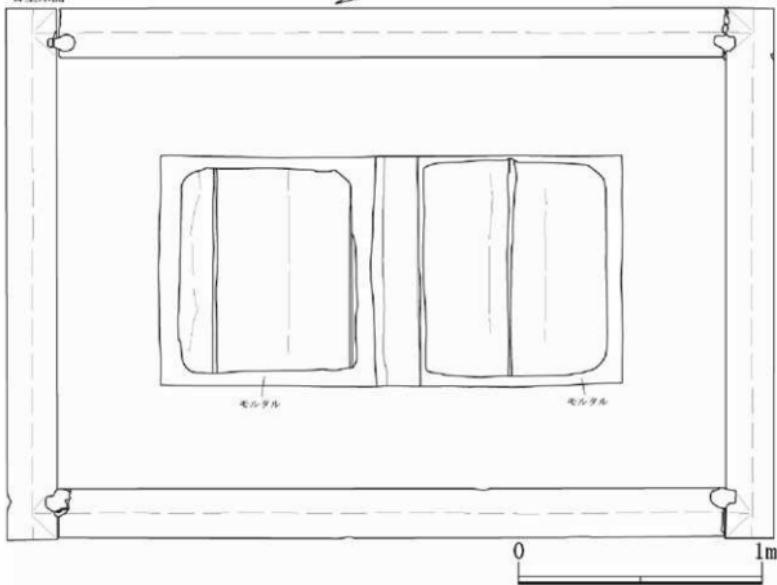


第6図 瓢塼平面図及び立面図

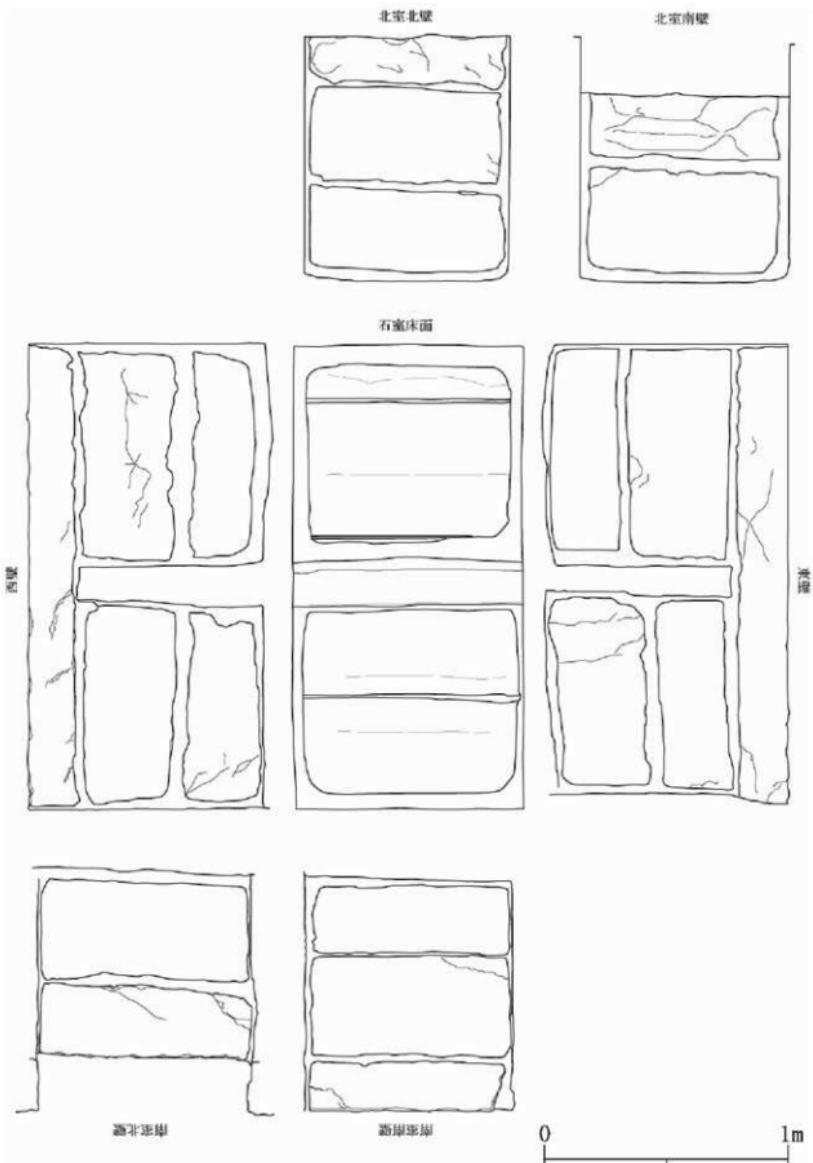
石室上面



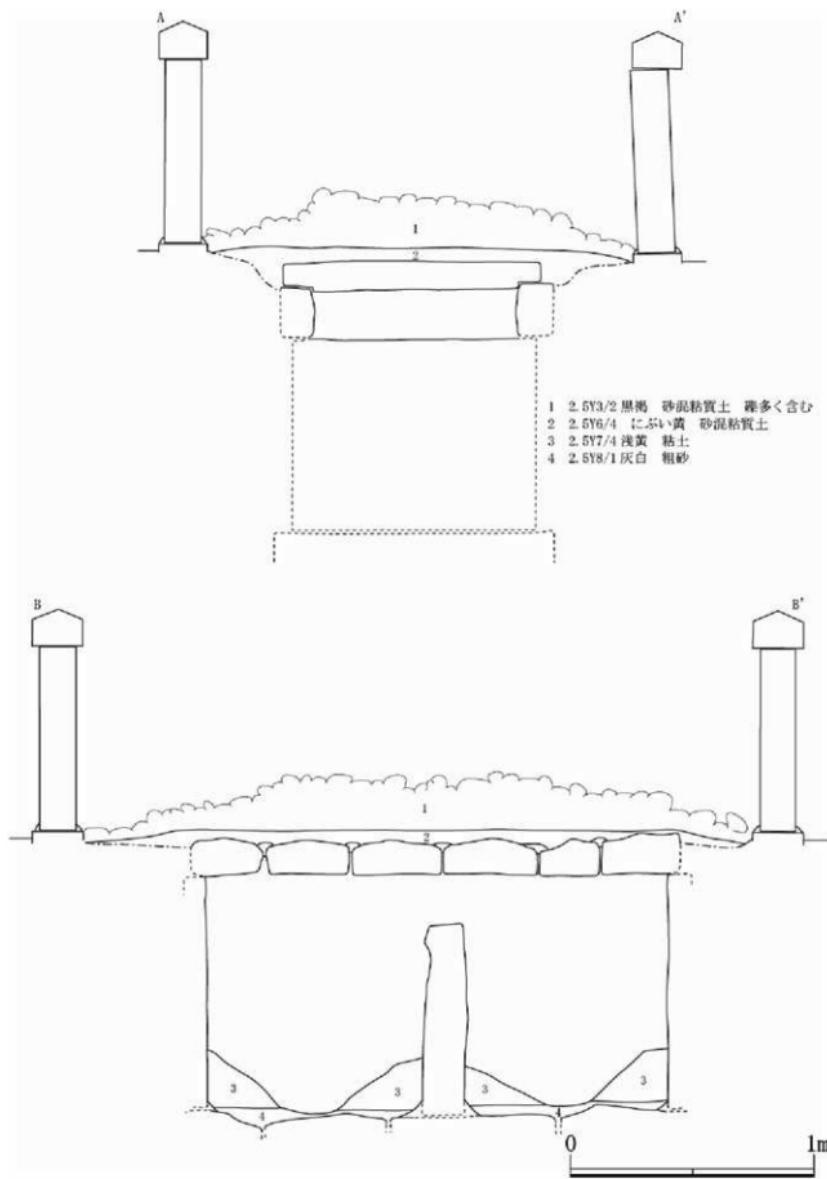
石室床面



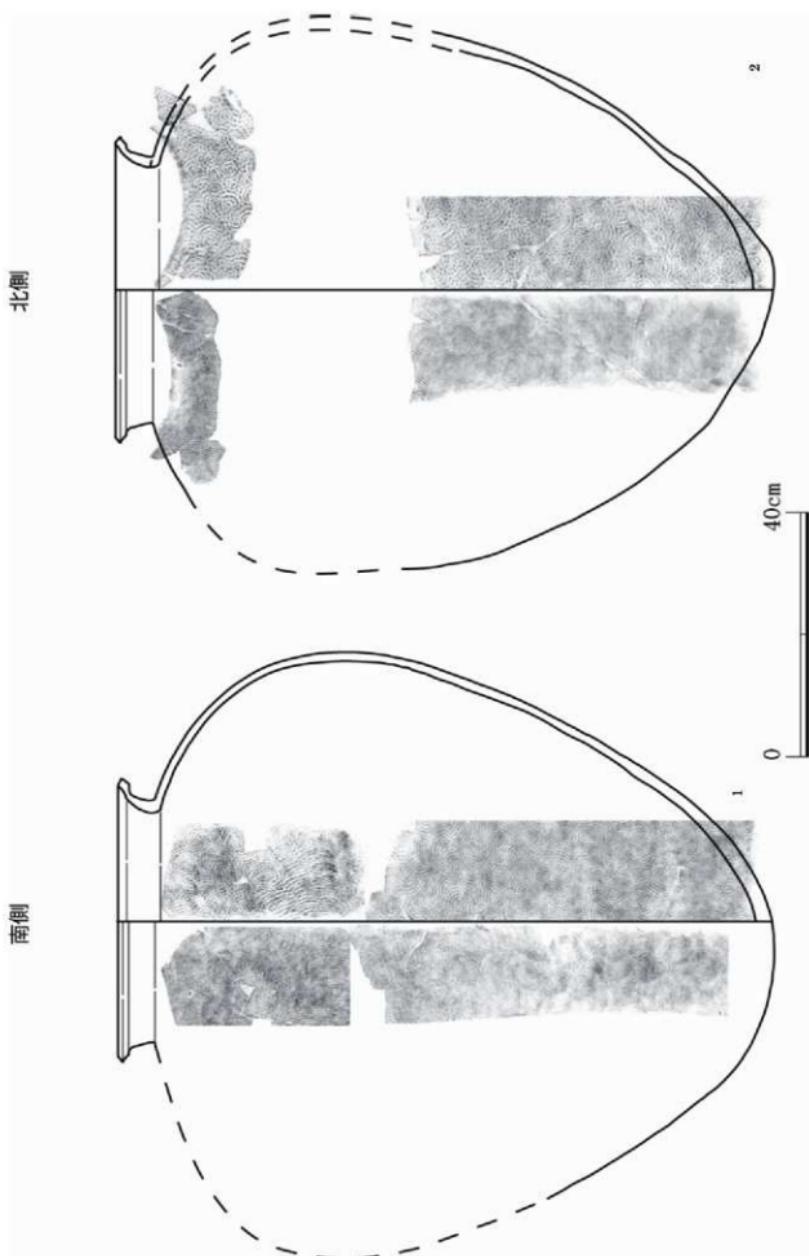
第7図 石室蓋石及び床面平面図

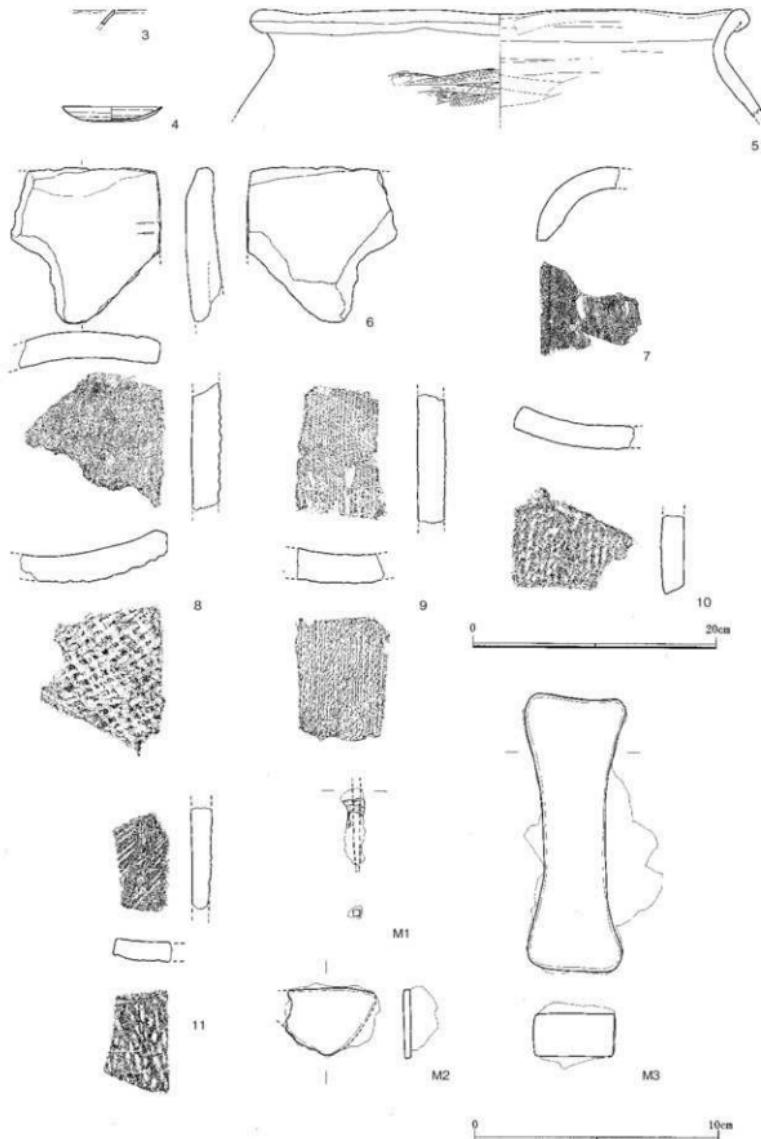


第8図 石室平面図及び立面図

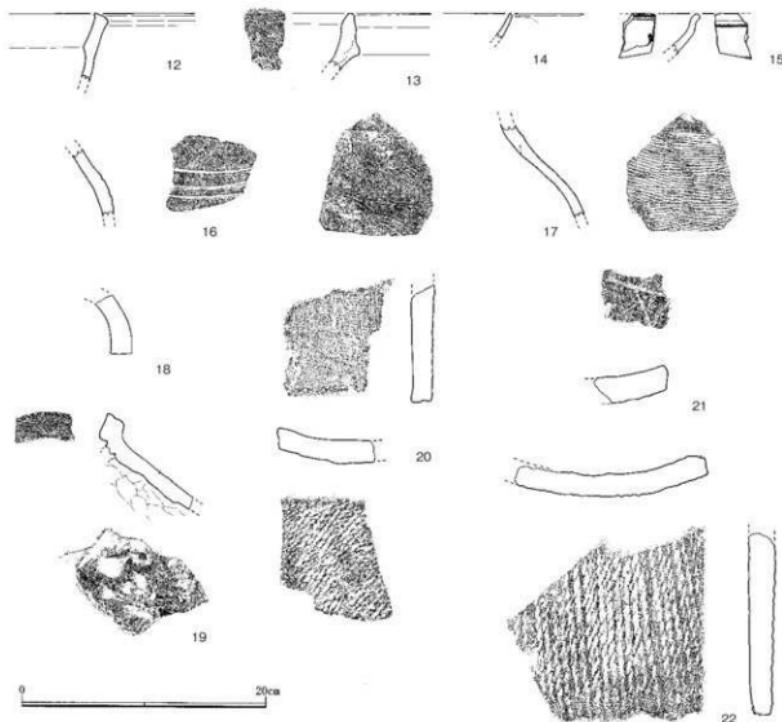


第9図 石室断面図





第 11 図 北側石室出土遺物



第12図 南側石室出土遺物

製のチキリである。銷により須恵器壺体部片が2枚重なって付着している。近世のものと考えられる。12～22は南側石室出土遺物である。12は土師質土器の鍋である。やや内湾する口縁部で、端部は面を持つ。14世紀後半頃のものである。13は陶器の擂鉢である。口縁部が垂直に立ち上がるものであり、内面に擂目が見られる。15世紀後半のものである。14は陶器の碗である。内外面に施釉されている。15は陶器の皿である。内外面とも鐵釉による文様が施され、その上から透明釉を施釉している。14・15は近世のものと考えられる。16は須恵器の壺体部で、外面に沈線3条が巡っている。17は須恵器の壺で、外面平行タタキ、内面は同心円の当て具痕が見られる。18は土師質の丸瓦で、内外面とも摩滅している。19は瓦質の瓦で、鳥食である。内面は指頭圧が見られ、外面はナデで、キラコの使用が認められる。近世の瓦と考えられる。20～22は土師質の平瓦で、摩滅が著しいが、概ね凹面布目、凸面繩目である。瓦については詳細な時期については不明であるが、清水神社の別当寺自性院に関連するものと考えられる。

第4章　まとめ

第1節　甕塚の構築時期について

伝承では長宗我部元親の兵火にあい、その後の風水害を経て甕塚ができたことと伝わっているが、その時期は不詳である。今回の調査でも石室内部のみの調査であったこともあり、甕塚の構築時期は不明と言わざるをえない。

甕塚の南脇には寛政2年（1790）の石碑が所在する。石碑には「山田郡由良山下有清水大明神祠里中社之其祀則浮圓自性院奉之祠前有二甕焉蓋言上古神櫛王醸酒之器也畜有十二甕嘗理祠傍地者一見存者二矣往昔有僧真雅者改為禱雨之具云於今歲旱自性院主就神祠面雩祀　大旱則洗灌二甕必獲雨今茲寛政二年庚戌夏大旱乃祈雨七日遂不獲涓滴之賜七月三日將修洗甕之法郡官郡吏皆會面須曳甚雨大至一郡蒙其澍澤於是大里正前田美雅壺井忠弘與小里正十八人謀作石柱以為周垣以報神惠之無極也　青葉養浩識　本藩儒員樞權左衛門」と刻まれている。碑文によると7日にわたって祈雨をしても降らなかつた雨が甕洗いを行つたところ降つたこと、その神の恵みに報いるため柱で周囲を囲つたこと等がわかる。このため、現在見られる甕塚周囲の玉垣については、寛政2年（1790）のものと考えられる。少なくとも甕塚が現在見られる形態になったのはこの時期と考えてよいだろう。

さて、塚の下部の石室の構築時期であるが、石室と玉垣の関係を見ると、石室を造る場合玉垣部分まで掘り方が必要と考えられる。玉垣を一度解体しない限り、新たに石室を構築することは不可能であり、石室の構築は玉垣と同時かそれ以前である可能性が高い。

なお、由良石の採石の開始時期は不明だが、清水神社及び神社東方約1kmに所在する蓮勝寺の由良石製の手洗石に元文2年（1737）と刻まれていることから、この頃に採石が開始された可能性が考えられる。雨乞い神事は元禄11年（1698）及び同12年（1699）に行つてゐるが、その次に行われたのが寛政2年であり、由良石の採石の歴史から考えると寛政2年に構築された可能性が考えられるが、推定にすぎず、今後の調査によって明らかになることを願う。

第2節　甕塚の甕について

今回の調査により、甕塚には伝承どおり甕が2個体納められていることが判明した。甕はいずれも7世紀頃のものであり、ほぼ同形状の甕であることも確認できた。このように7世紀頃までさかのぼる伝世品が存在したことは、神社や地域の歴史を考える上で重要な発見と言える。この甕の出自については、『全叢誌』は木太郷の詰田川河口の瓶瀬という所から出土したものとするが、同書以外においては神櫛王にまつわるものであり、当初から神社に所在した可能性が高い。

甕は出土状況からすると、現状では多数の破片となっているが、以前は概ね下部1/3が完形で残っていたと考えられる状況で出土した。ほぼ同じ高さで残つてること、割れ口が他の破片の割れ口と異なり摩耗が著しいことから、意図的に下部1/3とした可能性が考えられる。一方、甕は破片数は少ないが、南側の甕では口縁部まで接合関係が確認できており、本来は完形品であったこともうかがえる。当初完形品であったものが、ある時期に破損したため、下部1/3のみで雨乞いを行うようになった可能性が考えられる。

さて、調査の経緯においても触れたが、これまで甕の形状については『讃岐国名勝団会』においては皿鉢状に描かれているものの、昭和14年（1939）の神事において甕を掘り出した人物はラッキヨウ甕との証言をしている。『讃岐国名勝団会』においては、平底の皿鉢状に描かれているが、甕の文様に注目したい。外面は格子状、内面に同心円状の模様が描かれしており、格子目タタキと同心円の当て具を表現したものと考えられる。現状の下部1/3の形態は丸底鉢状であるが、この点を除けば『讃岐国名勝団会』は、甕下部の状況を描いたものと理解でき、幕末期には既にこの形状で雨乞い神事が行

われていたことを示唆するものである。なお、『讃岐国名勝図会』刊行の 1 年前の嘉永 6 年（1853）に雨乞い神事が行われている。

第 3 節 霽洗いについて

清水神社の霽洗い神事は、神社境内の石碑によると、これまでに承和 8 年（841）、寛永 3 年（1626）、寛永 10 年（1633）、承応 3 年（1652）、寛文 8 年（1668）、元禄 11 年（1698）、元禄 12 年（1699）、寛政 2 年（1790）、嘉永 6 年（1853）、明治 5 年（1872）、明治 8 年（1875）、昭和 14 年（1939）、昭和 19 年（1944）の 13 回が知られており、平成 24 年（2012）を入れると 14 回である。

最初の承和 8 年を除くと、江戸時代以降の記録しかなく、それまでの雨乞い神事の状況は不明である。江戸時代以降約 400 年間に 13 回実施されているが、雨乞いということもあって定期的に行っているものではないことから、元禄 11・12 年のように 2 年連続で行われた場合もあるが、元禄 12 年の後は寛政 2 年まで 91 年間行われないこともある。このため、儀礼の伝承は必ずしも当初の形態を保っているとは言い難いが、霽を洗い再埋納するという行為は古来のまま踏襲されてきたと考えられる。神社内の寛政 2 年の石碑には現在の伝承と同じ由来が刻まれていることから、少なくとも寛政 2 年以降は現在見られる雨乞い神事になったことは断定できる。

香川県の雨乞いについては、『讃岐の雨乞い踊』調査報告書（香川県教育委員会 1979）に詳しい。同報告書は西讃に分布する雨乞い踊についてまとめたものであるが、雨乞い踊以外にも多様な方法があることが紹介されている。氏神や童王があるところにお籠りして降雨を祈願する方法、降雨に効果があると信じられている特定の社寺や淵へ代参を出して水をもらって神前に供えたり、池に入れるなどして祈願する方法、社寺のお灯明をいただいて帰り、山頂や池の堤、童王の祠の前で大火を焚いて雨乞いを祈願する方法、水神や童神が住むと言われる淵や池、海などに不淨物を捨てたり、釣鐘をつけることによって、水神が怒り、降雨をもたらす方法、神輿を担いで村中や免場の田の中を歩いて降雨を祈願する方法、龍の作り物を海に流す方法などがあるが、霽を洗い雨乞いをするという事例は、雨の少ない香川県にあっても珍しい。

かつて屋島町（現在の高松市屋島西町・屋島中町・屋島東町）の大藪の氏神の森にも、洗えば必ず雨が降るが、洗った者は 3 年のうちに亡くなると伝わる霽があり、昔、新吉というものがそれを知りながら旱害を救うため洗ったところ、霽の中に住む白蛇の祟りにより亡くなったという伝承があるとされる（草薙 1952）が、屋島には大藪という地名も無く、現在そのような伝承も残っておらず、確認が取れない。

また、国分寺町新居の楠尾神社では、かつて縁あって清水神社の霽の 12 個のうち 1 個を譲り受けて神社内に祀っていたものを、昭和 14 年（1939）の大早魃の際に霽を棒持して島山頂上の童王社で、日々祈願を行ったとされる（国分寺町 1976・2005）。しかし、現神社宮司からの聞き取りでは、どこかの小宮にあったものと先代・先々代宮司から聞いており、現在その霽の所在も不明とのことで、清水神社との関係性は不明である。霽を使った雨乞いも昭和 14 年の 1 回のみであり、清水神社のように長期間にわたって霽が使われているということもない。昭和 14 年の雨乞いに際し際し、清水神社の雨乞いを模倣した可能性も考えられる。かつては周辺で同様の神事が行われていた可能性は否定できないが、『讃岐国名勝図会』に取上げられているということは、幕末期においても非常に珍しい事例であったと考えられ、少なくとも現在では香川県で唯一の雨乞い方法である。

全国的に見ても霽を清水で洗うという事例は見られないが、霽の再埋納という点で類似する雨乞いが知られている。福岡県太宰府市水瓶山ではその昔伝教大師が埋めたと言われる 6 個の霽が残っており、早魃の際に霽を掘り出し豊満山の益影の井と天拝山の童王の滝と四王寺山の頂の池の水を入れ、作り物の童とともに祈祷すると必ず雨が降るという。この霽には水霽と風霽との二種があると言われており、昭和 9 年（1934）に実際に雨乞いが行われている（高屋 1982、原文では水瓶山は四王子山と記載。四王寺山のこと）で、大城山を中心に岩屋山・水瓶山・大原山と呼ばれる 4 つの山から構成さ

れている。）。なお、甕の埋まっている場所を知っているのは 1 家のみで、先祖伝来の秘伝とされていました。この甕については昭和 37 年に調査が行われており、経塚を利用した雨乞いであることが知られている（杉山 1994）。A・B の 2 地点で経塚が発掘されており、A 地点では滑石製外容器 1 点が見つかっており、中に銅鋳製經筒があったとされるが残っていないかった。B 地点では滑石製經筒 1 点と陶製經筒 4 点が見つかった。陶製容器は壺形で雨乞いの際水を満たして使用したもので、これが水甕と呼ばれたようである。甕と呼んでいるものが經筒及び外容器であることがわかる。A 地点の外容器には弘長 3 年（1263）～長享 3 年（1489）までの 5 回にわたっての銘文があり、雨乞いごとに堀出し、追記していくといったとみられている。B 地点の滑石製經筒には文永元年（1264）の銘文があり、第 1 回の雨乞い行事と経塚発見の経緯が記されている。

このほか、甕を利用したり洗う行為を行う雨乞いの類例も高屋 1972 に詳しい。甕を利用するものでは、岡山県井原市美星町三山の竜王山及び同美星町黒木では甕の水を入れ替えるとともに、火を焚く方法がとられている。岡山県岡山市北区高松の中山では山頂に豊島石が環状に置かれ壺が入れてあり、そこで火を焚く方法がとられている。これらの事例は壺を使用し続けている点で類似性が見られる。清水神社の甕洗いは火を焚くことはないが、甕洗いとは別に毎年の夏祭りにおいて五穀豊穣と雨乞いのため「お火あげ神事」と呼ばれる火を焚く神事を行っており、必ずしも類似性がないとは言えない。

さらに、広島県三原市三原の龍王山では山頂に壺が埋められ神官が祈る方法、山口県下関市有富の竜王社では御神体の須恵器の壺を担いで海岸に出るという方法がとられている。奈良県五條市の地福寺には役行者が雨乞いしたときに竜宮の使いから授かったとされる壺が伝わる。秋田県湯沢市皆瀬では甕子明神ではフリコガメという 2 個の甕の水を混ぜるという方法がとられている。これらは清水神社の甕洗いとの類似性は低いものである。

物を洗う行為を伴う雨乞いについては、美作や備中では家々から枠を持ち寄り枠を洗うという百枠洗いや山口県下関市では村の各戸から 1 丁ずつの硯を出させ川で洗うという硯洗い（千丁洗い）などが知られる。このほかにも、鍋洗いや禪洗いという事例があるが、その多くが水を汚す行為で、清水神社の甕洗いとは直接の関係性は見られない。

以上のように、全国的に見ても特異な雨乞いであり、今後この有形民俗文化財を後世に正しく引き継ぐことが重要である。

参考文献

- 高松市教育委員会 2002『高松市川東団地住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』由良南原遺跡』
香川県教育委員会 2008『春日川河川激甚災害対策特別緊急工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 大瀬遺跡』
佐藤竜馬 2000『高松平野と周辺地域における中世土器の編年』『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 空港跡地遺跡 IV』香川県教育委員会・(株)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
川島郷土誌編集委員会 1995『川島郷土誌』川島校区地域おこし事業推進委員会
香川県教育委員会 1979『讃岐の雨乞い踊』調査報告書』
国分寺町誌編纂委員会 2005『さぬき国分寺町誌』国分寺町
国分寺町史編集委員会 1976『国分寺町史・補遺』国分寺町役場
杉山洋 1994『淨土への祈り 経塚が語る永遠の世界』雄山閣出版株式会社
高屋重夫 1982『雨乞い習俗の研究』財団法人法政大学出版局
草薙金四郎 1952『讃岐の伝説 第一集』香川教育図書

遺物觀察表・土器・陶磁器・瓦)

| 番号 | 出土地 | 種類 | 器種 | 法量 | | 調査・文様 | | 色調 | 表面(片面) | 内面(片面) | 相隔 | 地 |
|----|------|-------|------|--------|--------|-------|----------------|---------------|---------------|--------------|--------------|----------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 底径(幅) | | | | | |
| 1 | 南側石室 | 須恵器 | 甕(瓶) | [44.0] | — | 107.6 | 横子口タタキ、自然輪 | 須心口あて具頭 | 565/1黒灰 | 精良 | 長石 | 燒成 |
| 2 | 北側石室 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | 横子口タタキ、自然輪 | 同心円あて具頭 | 565/1黒灰 | 精良 | 長石 | 良好 |
| 3 | 北側石室 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | 横子口タタキ、自然輪 | 同心円あて具頭 | 565/1黒灰 | 精良 | 長石 | 良好 |
| 4 | 北側石室 | 備前焼陶器 | 甕 | [8.0] | 2.0 | 1.2 | — | ヨコヘアヌギ | NA/0灰 | 精良 | 精良 | 良 |
| 5 | 北側石室 | 備前焼陶器 | 甕 | [39.2] | — | [8.9] | ナホのち回転ヘタケダリ | ヨコハナラヂ | 5784/6/1灰 | 精良 | 砂粒 | 良好 |
| 6 | 北側石室 | 土師質 | 平瓦 | [12.8] | 2.1 | 2.1 | タタキ | 摩滅 | 7.5786/1灰 | 7.5786/1灰 | 7.5786/1灰 | 良 |
| 7 | 北側石室 | 土師質 | 丸瓦 | [7.2] | 1.7 | 1.7 | 布目、ナデ | ヘラミキ、ナデ | 2.577/2灰黄 | NS/0前灰 | 2.577/2灰黄 | 良 |
| 8 | 北側石室 | 土師質 | 平瓦 | [11.5] | 12.1 | 2.4 | — | 横子口タタキ | 578/1灰 | NS/0前灰 | 578/1灰オーラブ | 良 |
| 9 | 北側石室 | 土師質 | 平瓦 | [10.6] | [7.1] | 2.3 | 布目 | 横目 | 10788/3灰黄褐 | 10788/3灰黄褐 | 10788/3灰黄褐 | 赤色砂粒 |
| 10 | 北側石室 | 土師質 | 平瓦 | [6.5] | — | — | 布目 | 横目 | 578/1灰 | 578/1灰 | 578/1灰 | 黑色砂粒 |
| 11 | 北側石室 | 土師質 | 平瓦 | [8.7] | [5.4] | 1.6 | タタキ | 横目、ケズリ | 10788/3灰黄褐 | 10788/3灰黄褐 | 10788/3灰黄褐 | 粗、石英・黒色砂粒・金雲母 |
| 12 | 南側石室 | 土師質土器 | 甕 | — | — | [5.7] | ヨコナナデ | ヨコナナデ | 7.5786/4にぶい黄褐 | 10786/3にぶい黄褐 | 10786/3にぶい黄褐 | 石英・長石 |
| 13 | 南側石室 | 陶器 | 關朴 | — | — | [4.7] | 回転ナナデ、重ね毛唇 | 回転ナナデ、帽口 | NS/0灰 | NS/0灰 | NS/0灰 | 砂粒 |
| 14 | 南側石室 | 陶器 | 甕 | — | — | [2.1] | 施釉 | 施釉 | 2.578/3灰黄 | 2.578/3灰黄 | 2.578/3灰黄 | 良 |
| 15 | 南側石室 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | 施釉(透明釉)、文様(鉛釉) | 施釉(鉛釉)、文様(鉛釉) | 578/2灰白 | 578/2灰白 | 578/2灰白 | 良 |
| 16 | 南側石室 | 須恵器 | 甕 | — | [5.6] | — | — | ヨコナナデ | NS/0灰 | NS/0灰 | NS/0灰 | 良好 |
| 17 | 南側石室 | 須恵器 | 甕 | — | — | [7.8] | 回転ナナデ、平行タタキ | 同心円あて具頭 | 2.577/1灰白 | 2.577/1灰白 | 2.577/1灰白 | 良 |
| 18 | 南側石室 | 土師質 | 丸瓦 | [4.8] | [3.0] | 1.5 | 布目 | 摩滅 | 2.576/1灰黄 | 2.576/1灰黄 | 2.576/1灰黄 | 良 |
| 19 | 南側石室 | 土師質 | 鳥食 | [9.5] | [3.0] | 1.3 | ナデ、キラコ | 指端圧 | NS/0灰 | NS/0灰 | NS/0灰 | 砂粒 |
| 20 | 南側石室 | 土師質 | 平瓦 | [10.1] | [8.2] | 1.7 | 布目、工具痕 | 横目 | 10787/4にぶい黄褐 | 10787/4にぶい黄褐 | 10787/4にぶい黄褐 | 石英・長石 |
| 21 | 南側石室 | 土師質 | 平瓦 | [6.0] | [5.5] | 2.2 | 布目、工具痕 | 磨滅 | 7.5788/1灰白 | 7.5788/1灰白 | 7.5788/1灰白 | 石英・長石・黒色砂粒・金雲母 |
| 22 | 南側石室 | 土師質 | 平瓦 | [15.8] | [15.8] | 1.8 | 布目 | 横目 | 10787/4灰地 | 10787/4灰地 | 10787/4灰地 | 不規 |

遺物觀察表(金属器)

| 番号 | 出土地 | 種類 | 器種 | 法量 | | 特徵 |
|----|------|----|-----|--------|-------|-----------------------------|
| | | | | 底 | 壁 | |
| W1 | 北側石室 | 檢器 | 鉄刀 | [3.1] | 0.35 | — |
| W2 | 北側石室 | 檢器 | 鐵板 | [2.8] | [3.6] | 刃に対する直交方向の木質付着。 |
| W3 | 北側石室 | 檢器 | [+] | [11.4] | 4.1 | 1.7 鉗とともに頭部要体部分2枚重なって付着。 |



由良山遠景（南から）



清水神社遠景（東から）



清水神社拝殿（東から）



拝殿唐破風屋根飾り中央（東から）



拝殿唐破風屋根飾り北側（東から）



拝殿唐破風屋根飾り南側（東から）



元文 2 年（1737）銘入清水神社手洗石（西から）



寛政 2 年（1790）の雨乞いの石碑（西から）



上御塩跡（東から）



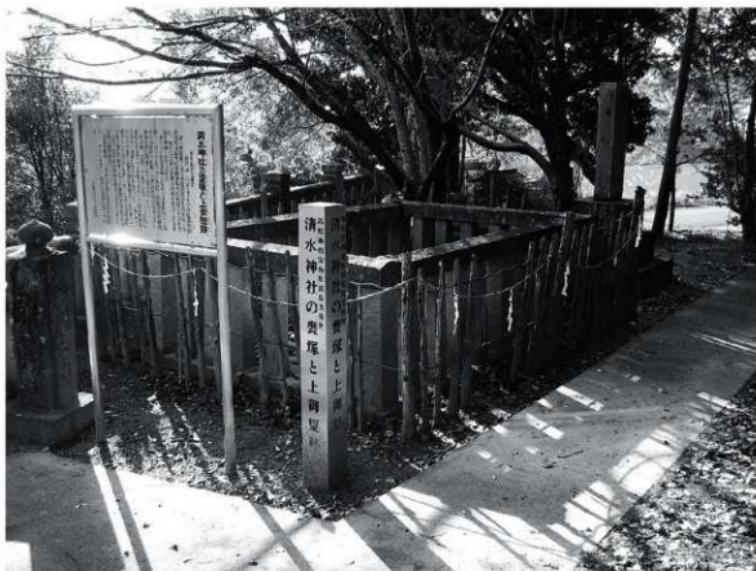
中御塩跡（西から）



下御塩跡（東から）



竜王社（左）と石錬社（右）（東から）



甕塚全景（北から）





壟塚石材撤去作業状況（西から）



壟塚半裁状況（南から）



壟塚石材撤去作業状況（南西から）



石室蓋石検出状況（真上から、左が北）



石室蓋石撤去作業状況（南から）



石室蓋石撤去作業状況（南西から）



石室内甕検出状況（西から）



南側石室甕底部検出状況（西から）



甕取上げ後（西から）



石室完掘状況（真上から、左が北）



石室蓋石裏面



南側石室出土甕底部



南側石室出土遺物



北側石室出土遺物



宮司による甕の水洗作業



氏子による甕の水洗作業



南側石室出土甕



北側石室出土甕



南側石室出土甕口縁



北側石室出土甕内面



出土遺物写真



雨乞い神事の様子

報告書抄録

高松市指定有形民俗文化財
清水神社の甕塚調査報告書

平成 29 年 3 月 31 日発行

発行：高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
印刷：有限会社 中央ファイリング